地域の学びの場を創る

～ 年間活動報告 ～

鹿児島大学生涯学習教育研究センター　リサーチアドバイザー
モノづくり工房 ～ 響 ～ 代表　牟 田　京 子

1．はじめに

モノづくり工房 ～ 響 ～ は 2010 年に代表の個人活動として始まり、2011 年に団体設立し、鹿児島市の男女共同参画センターを拠点として活動しているボランティア団体である。活動目的は以下の 3 つ。

(1) 市民の想像力・創造力の育成・豊かな情操を促す活動に尽力すると共に、対話の機会を増やし、健全な家庭づくり・地域づくりの手助けをする。

(2) 健全で潤いのある地域社会づくりに貢献するため、地域の仲間（日本人・外国人問わず）を巻き込んだ交流の場づくりを行うと共に地域に根ざした国際交流を推進するため国際交流の機会を設け市内レベルの相互理解と友好親善を通し、地域の活性化及び国際化に寄与する。

(3) 当会の目的に沿った形での人材育成・発表の場作りに努め、鹿児島の地域活性化に寄与する人材を育てる。

当会の活動すべてに通じる言葉を一言で表すならば「学び」である。世代・性別・国籍を超えフラットな立場で対話・交流をすることは多様な価値観を認識することにつながる。今までの社会は地域や国など活動範囲が限られていたが、国や文化を越えあらゆるものが入り交ったグローバル社会になりつつある現代社会において、どのような場においても活躍できる個性豊かな多様な文化の接触に対応できる生き方が必要とされている。価値観が広がれば世界が広がり、世界が広がれば人生が豊かなものになると考えている当会では以下の創造的活動を通した学びの場づくりを行っている。

(1) 市民の想像力・創造力の育成・豊かな情操を促すための活動

(2) 健全な家庭づくり・地域づくりを支援する活動

(3) 地域の交流の場を提供するための活動

(4) 日本に住む外国人と日本人とを結び、相互理解と友好親善を通し、地域の活性化及び国際化に寄与するための活動

(5) その他、本会の目的を達成するために必要な活動

2．多様なニーズに応える具体的な取り組み（平成 24 年度）

鹿児島市は、「市民参画の推進」と「市民活動の促進」の 2 つの柱をたてて、「市民との協働によるまちづくり」を進めている。鹿児島市ホームページ市民参画の窓～市民との協働～で「協働とは、市民グループや住民の方々も担い手となって、新しい公共をつくること」と説明している。なぜ今の時代に「協働」という言葉が取りざたされるのか、それは市民の多様なニーズに行政が応えるにも限界があるからだ。

(1) 具体的な取り組み

2012 年に当会が行った企画は 192 企画ある。国際交流に関するもの 34、ワールドカフェ（対話の場）に関するもの 2、市民との協働講座 9、キャリアアップ講座 27、語学講座 98、その他 22 企画を実施した。

図 1　かごしま有機生産組合組織図

(2) 活動の特徴

① 国際交流に関するもの

料理で国際交流

鹿児島県内在住の外国人と日本人が、お互いに料理を持ち寄り親睦を深める交流会が6月29日、鹿児島市のサンエールかごしまであった＝写真。

外国人10人を含む53人が参加。会場にはマーボー豆腐やスペインオムレツ、日本の郷土料理などが並び、参加者は料理を食べながら会話したり、クイズで各国の文化を紹介して楽しんだ。

スペインから来日したばかりのダニエル・ロベスさん(23)は「鹿児島の人はフレンドリー。知り合いができてよかった」。主催した「モノづくり工房～響～」は今後も交流会を開く予定で、牟田京子代表(39)は「気軽に国際交流できる場になれば」と話した。

（南日本新聞 2012 年 7 月 7 日掲載）

国際交流企画は会設立当初より変わらぬ人気がある。特に当会の特徴として英語力に重きを置いていないため、日本語以外の語学ができない人も気軽に参加できるという敷居の低さが好評の理由である。さらに子供の頃から「日本ではなかなか感じることのできない多様な文化」を体感してほしいと願う保護者が多数存在することも理由の1つである。食文化交流や文化理解講座においては、講師に留学生を採用することで「母国に関心を持ってほしい」と思う留学生と「異国について知りたい」という地域住民との「相互関係における学びの場づくり」を可能にした。相互の学びという視点から見た場合、日本語学校に通う留学生にとっての学びは母国を知ってもらえるというだけでなく、日本語上達という日本に来た本来の目的が達成できるという点にある。日本語上達のカギは「どれだけ日本人と日本語でコミュニケーションを図る機会があるか」という点に尽きるが、日本語学校と当会が連携することで留学生と日本人のつながりを創出し、留学生にとっての学びの場となっている。地域住民は鹿児島に居ながら海外の人々と接し、異なる考え方や価値観を目にすることができる。留学生は自らを紹介する場合、母国への深い情を抱き国や町や村を紹介している。同じように地域住民が鹿児島や日本を紹介する場合があるが、留学生と日本人を比較した場合、母国に対する知識の幅に隔たりを感じる。学びという観点から考え、日本人が日本についてもっと深く知るきっかけ、留学生がもっと日本の事を知るきっかけをつくるため、日本の伝統を伝える国際交流を取り入れている。その代表的なものが空手体験や大島紬の織り機体験、食を通した日本文化理解体験である。特に大島紬においては世界3大織物の1つであること、実際の織り機体験が地元で体験することが可能だということが参加する地域住民に知られていなかった。日本文化理解体験を実施する上で、普段より連携を取っている地域との「つながり」が生きた。荒田に所在する工場と連携し、見学ツアーを行い、鹿児島大学の学生で空手の有段者に講師を引き受けてもらい国際交流に個人が持つ技能や趣味を生かすという取り組みを実践した。

大波小波

鶏飯デリシャス

鹿児島県内在住の外国人が日本人と一緒に料理を楽しみ、親交を深める交流会が27日、鹿児島市のサンエールかごしまであった。

海外からの留学生ら4人を含む約20人が奄美大島の郷土料理の鶏飯作りに挑戦＝写真。参加者は、英語と日本語の2種類のレシピを参考に、簡単な英語と日本語で会話を楽しみながら仕上げていった。

チリから約5年前に来日した同市田上2丁目のアレ・サンドラさん(30)は「日本料理が学べ、友達もできて楽しい」。主催する「モノづくり工房〜響〜」の牟田京子代表(39)は「日本語が話せない方も気軽に参加して」と呼び掛けている。

（南日本新聞 2012 年 6 月 1 日掲載）

② ワールドカフェ（対話の場）に関するもの

ワールドカフェとは Juanita Brown（アニータ・ブラウン）氏と David Isaa（デイビッド・アイザックス）氏によって、1995 年に開発・提唱されたものである。「知識や知恵は、機能的な会議室の中で生まれるのではなく、人々がオープンに会話を行い、自由にネットワークを築くことのできる『カフェ』のような空間でこそ創発される」という考えに基づいた話し合いの手法を指す。この対話の場に参加することで自分の意見を否定されず、尊重されるという安全な場で、相手の意見を聞き、つながりを意識しながら自分の意見を伝えることにより生まれる場の一体感を味わえる。高校在籍中に参加した U さんは大学生になった今も「年齢や職業を超えた語り合いに参加することで自分自身の新たな可能性が広がった」と言う。そして彼女はいつか自分が話し合いをまとめられる人に成長したいと感じている。彼女が「話し合いをまとめられる人になりたい」と言った理由は、第 2 回目のワールドカフェで当時大学生 4 年生であった S さんがファシリテーター（進行役）を勤めたからだった。同世代の学生が多くの人の前に立ち、話し合いを進行しまとめている姿に驚いたと述べている。この S さんと私も当会の活動を通して出会ったが、S さん自身、多様なメンバーが集まる場でのファシリテーター体験は初めてであり、会終了後、ほっとし涙する場面も垣間見えた。「私を信じて任せてくださった、その期待に応えたかった」と S さんは言った。人は自分の存在や価値を認めてもらえた時、その期待に応えようと努力し、その努力が実った時に達成感を感じ、感動するものだということをこの事例から実感した。これからのまちづくり・地域づくりに必要となるのは次世代を担う若者と呼ばれる世代である。彼ら・彼女らが達成感を感じ前向きに行動することは、地域が活性化する源になると思い、若い世代の育成を行う必要を感じた。

（ワールドカフェの風景）

③市民との協働講座

協働企画を複数回行ってきたが、その始まりは Milton Margai 大学 Santigie Sesay（サンティゲ・シセイ）氏からの要請である。Santigie 氏は国際協力機構派遣事業の一環で来日し、種々の国際交流に参加したが、参加するたびに自分の国（シエラレオネ）について日本人が知らないことを残念に思っていた。「母国について知ってほしい」「母国について情報を発信したい」という Santigie 氏の想いを汲んだ当会参加者が「モノづくり工房～響～なら協力してくれるかもしれない」と当会に打診。打ち合わせを数回繰り返したうえで、8 月 26 日に英語でのシエラレオネ文化理解講座を開催した。これが記念すべき市民との協働講座の 1 回目となった。

☆シエラレオネ知って

西アフリカの小国シエラレオネについて学ぶ文化理解講座が8月26日、鹿児島市のサンエールかごしまであった＝写真。同国の大学で教えるサンティゲ・シセイさん（40）が英語で講演、市民ら約30人が熱心に聞き入った。

シセイさんは、人口約600万人で1961年に英国から独立した若い国であることを紹介。主食はコメだが、さまざまなソースをかけて食べること、一夫多妻制が認められていることなど文化や習慣の違いに触れた。

シセイさんは昨年、国際協力機構（JICA）の研修で鹿児島を訪れ、今回は夏休みを利用して再訪。「日本ではほとんど知られていない母国に関心を持ってもらえればうれしい」と語った。

藤誠一朗さん（22）は「環境や文化の違いが新鮮だった」と話した。

（南日本新聞 2012 年 10 月 19 日掲載）

（文化理解講座終了後、世界地図で母国を指さし記念撮影をする Santigie Sesay 氏）

発表の場を求めている人がいるという事を実感した当会はその後も要請にこたえる形で志學館大学 Y さんによるカンボジアスタディーツアー報告会、鹿児島大学フェアトレードサークルによる分科会協働講座。ドイツ語講師である Jochan Schönau（ヨハンシューナウ）氏による交換の輪（ドイツ人が物を大切にする気持ちを伝えたいと物々交換企画を実施）将来教師を目指す大学生が企画した子供向けの異文化理解企画などを実施した。

市民団体の良さは要望に対して直ぐに対応できる点にある。鹿児島県・鹿児島市でも国際交流協会が留学生支援や在日外国人支援を行っているが、Santigie 氏を例に挙げて述べるならば、「情報を発信したい」という気持ちを伝えるべく企画書を書き、予算を見積もり、承認されるための手続きを踏む。その結果、採用されたとしても来年度の事業に組み込まれることになる。短期間しか滞在できない旅行者や、短期留学生にとっては、温めた企画を発揮するチャンスがないと言える。市民団体であれば活動の趣旨が団体の目的と合致しさえすれば、すぐに対応が可能となる。

④キャリアアップ講座

鹿児島市と協働企画としてボランティア養成講座や会議の司会進行役を担える人材を育成するためにファシリテーション勉強会を行うなど、地域で活躍する人材育成やキャリアアップにつながる企画を開催している。地域で活躍する女性経営者を招きその体験談を聞く交流会に関しては、鹿児島という身近な場所で頑張る人がいるということが実感できる。キャリアアップ講座で参加者に「今までやりたかったがしなかったことは何か」という質問をしている。実際に活躍している経営者の話を聞いた後だからこそ、自分の努力や意思が足りなかったことを認識し、参加後「今まで韓国に行きたかったけれど、なぜ行かなかったか考えてみたらいけない理由はないことに気が付いた」と 2 か月後に念願の海外旅行を実現した参加者、「フラのインストラクターになりたかったが一歩を踏み出す勇気がなかった」と、インストラクターとしての勉強を開始した参加者、「手帳術の講師になる

勉強をしたかったができないのではなくしなかっただけだと気が付いた」と、インストラクター養成講座を受講した参加者などが現れた。個人の変革だけでなく、他者と協働する参加者も現れた。具体的事例をあげると、アロマコーディネーターの有資格者・ものづくりを趣味とする参加者・集客を得意とする参加者が協働し「癒しのバスボムを作ろう」というイベントを創出した。また、コーチングコーチ・カラーコーディネーターの有資格者が協働し婚活イベントを創出するなど当会のキャリアアップ講座で出会った参加者同士がお互いのもつ資格や趣味を生かし協働することで新しい企画が創出された。

⑤語学講座

比較的多い要望が「語学」に関する講座である。鹿児島市には数多くの語学教室（英語）があるが、スペイン語やドイツ語を学べる場は数少ない。当会では数多くの留学生や在鹿外国人を講師として招き、市民に広く学ぶ場を提供している。特に「英語で学ぶ平家物語」や「英語で学ぶ源氏物語」の講座に関してはドイツ人講師が日本文化に詳しいこともあり、短歌や俳句などという日本古来の文学も織り交ぜ講座が行われた。日本文化をもっと知ってほしいという講師の勧めにより講座生は皇室歌会始に応募した。これは語学学習をきっかけに文化的活動の幅が広がった事例である。

⑥その他

当会が活動開始当時から行っているモノづくりが挙げられる。現在は純粋にモノづくりを楽しむという媒体として使うのではなく、モノづくりを通した国際交流や相互理解につなげるツールとして活用している。例えば、子育て中の親子が参加し仲間つくりや不安や負担感の緩和を図ることを目的として行う親子クレイアート教室の実施。市民の生涯学習意欲を向上させるための教育委員会主催企画への参画。不登校の子供たちが通う学校へ情操教育の一環で創造活動指導を行うなどが挙げられる。

3．今後の課題と展望

当会の目的である①健全な家庭づくり・地域づくりの手助け②地域の活性化及び国際化に寄与する③鹿児島の地域活性化に寄与する人材を育てる。この目的を継続した取り組みにするには当会の活動を担う若い人材確保が必要となる。だが、現在の当会を運営するメンバーは壮年期が主である。継続した活動にしていくためにも若者がリーダーとなり、地域を盛り上げて行く活動を行い、若い人達の考えが尊重できる活動の場を継続して作ることで地域が活性化し、今よりも魅力的な地域になると考える。そのため当会では積極的にまちづくり活動に参画し、従来の活動における問題や課題を客観視しながら把握し当会の活動目的達成に必要な課題を整理していくつもりである。